

山田美妙『日本大辞書』の方言語彙

湯 浅 茂 雄

0. はじめに

山田美妙（武太郎）の『日本大辞書』は、明治25年7月から明治26年12月にかけて十二分冊（十一冊本もある）で出版された。大槻文彦の『言海』（明治22年～24年）の刊行を受けて、そこにアクセント（美妙の用語は「音調」）の注記がなく、類義語の説明も不十分であることを不満として、みずからの国語辞書観によって作り上げたものである。口述速記でまとめたもので、刊行を含めて二年足らずで完成させた。国語辞書では初めて説明に口語体を採用した。見出し語数は湯浅茂雄（2021）の調査では53139語を収める。

本書の国語資料としての価値については、全ての見出し語に当時の東京語のアクセントを注記したことは高く評価されているが、その他の点については、たとえば『国語学研究事典』（明治書院 昭和52年11月）の「日本大辞書」の項（前田富禊氏執筆）に、以下のようにあるように、評価は必ずしも高くない。

特に後半の部分の記述は粗雑である。国語辞書編集の構想としては高く評価できるが、でき上がったものは歴史的意義を認め得るに過ぎない。

また、『日本語大辞典 下』（朝倉書店 2014年11月）の「日本大辞典」の項（犬飼守薫氏執筆）も同様の評価である。したがって、本書は国語資料としてはアクセント史資料以外の分野では、殆ど活用されてこなかったとあってよく、明治時代語の資料として、参照率が高くない資料である。

しかしながら、前稿の湯浅茂雄（2021）で述べたように、『日本大辞書』に立項された各見出し語の内容を細かく検討していくと、明治期の日本語を知る

材料として価値ある情報を読み取れると考えるのである。そのような観点から、本稿では『日本大辞書』に取り上げられた方言語彙に着目してみたい。

1. 「日本辞書編纂法私見」にみられる「方言」への言及

『言海』では「凡例」(一)に「方言ハ、大抵、東西両京ノモノヲ取りテ、諸国辺土ノモノハ、漏ラセルモ多シ」とあるように、収録の範囲への言及があるが、『日本大辞書』の編纂方針が示されている「緒言 日本辞書編纂法私見(一～二十五に分かれる)にはそのような言及は見られないものの、「方言」に関して(十四)と(十五)に以下のような言及がある。

(十四) ソレゾレノ語ノ性質ヲ以上の六種ノ解デ明キラカニスルト同時ニ又ソノ語ガ古語(雅)デアルカ、普通語デアルカ、乃至廢語デアルカ、俚語、方言デアルカヲ示スノガ辞書ニ当然ノ事デアル。此日本大辞書ハ一一ノ語ニ此注意ヲ怠ラス。

(十五) (前半を省略)

東京デしろり(白瓜)、京都デアさうり(朝瓜)、所謂「難波ノ葦ハ伊勢ノ浜荻」デ土地ナドノ相違カラ自然ニ言語ニモ相違ノ有ルノハ逆モ免カレ得ラヌモノデ、コレヲ一地方又ハ一部分ニ限ツテ通用シ得ルダケノ語ガ即チ誰モイフ方言デアル。

俚語ハ方言ノ一部分デアルニハ相違ナイ、ソノ何ノ点カラ方言ト違フカハ甚ダ説明ニモ苦シム。ワズカニ注目スベキ処ハ方言ハ真面目ナ思想デ云ヒ、俚言ハ真面目デナイ思想デイフ、只此ノ奇妙ナ点バカリ。ヨシヤ東京デあり(蟻)トイフノヲ越後デありん坊ト云ニシロ、其云ヒヤウニ真面目ナ思想ガ有レバ充分ニ方言トハ見ラレル。処ヲ、モシモ東京デありん坊ト云ツタライカガ?東京ニありノ語ガ無イナラ知ラズ有ツテ殊更ニ他ノ方言ヲ用キルカラニハ其用キルトキノ思想ノ真面目デ無イコトハ云マデモ無イ。

上のうち(十四)の「六種ノ解」は、「発音、音調、語類、語源、解釈、書典例証」である。そして「一一ノ語ニ此注意ヲ怠ラス」の「注意」は、記号で区別されて、すべての見出し語に付けられるもので、その内容は「○文専用 ●言専用 無印 言文両用 ++す、又ハするデ動詞ニナルモノ △古語、廢語 ▲方言、俚言」である。現在の文体注であるが、これがすべての見出し語に付されていることが注目され、『言海』の文体注(「……古キ語、或ハ、多ク用キヌ語、++……訛語、或ハ、俚語」)との比較を含め、当時の文体意識を知る上

での言語資料ともなるものである。

この文体注のうち「▲方言、俚言」が付されている項目に方言語彙が含まれることになる。また、ここには「俚言」も含まれるが、「方言」と「俚言」の相違については(十五)で、「真面目ナ思想」(方言)、「真面目デナイ思想」(俚言)という独特の表現で説明されている。

この「▲方言、俚言」の注記の実際を、(十四)で取り上げられた語で例示すると以下のようなものである。

<p>▲あさうり (第一上名。浅瓜) (色)あさ(浅)うり(瓜)ノ義。京都邊ノ語、シ ロウリ。(二)へちまノ別名。</p>	<p>▲ありんぼう (第四ボ)(全平)名。越後ア マリデオモニイフ方言。 アリ。 ありんぼ(…名)。ありんぼうト同ジコ トバ。同シ邊デ云フ。</p>
---	---

「東京デしろり(白瓜)」、「東京デあり(蟻トイフ)の、「しろり」と「あり」も見出し語として立項されているが、注記は、無印(言文両用)であり、これによれば、「しろり」「あり」を東京の方言と捉えているわけではないことが分かる。

方言として立項されている場合は、例示の「京都辺ノ語」や「越後アタリデ」のように、その語の使用されている地域名が示されている。

このように説明される地域名に注目して、次項で『日本大辞書』に立項された方言項目の地域の広がりを見てみたい。

ちなみに、「あさうり」については『言海』にも「(一)しろりノ一名。(京都) (二)へちまの一名」があるが、「ありんぼう」「あ

りんぼ」については『言海』には立項がないように、『日本大辞書』は『言海』に比べて、方言に関する見出し語の立項が多く、そこにも価値ある資料性を見いだすことができる。

2. 立項された方言項目の地域

『日本大辞書』に立項された方言項目における地域の表現は極めて多様である。たとえば東北地方でいえば「南部」「南部ナドノ」「南部カラ津軽」「岩手ノ東北カラ青森」等々である。今、これらを北海道から九州(沖縄を含む)に区分して、方言項目の地域の広がりを見たものが以下である。

(「松前4」などの数字は調査時に心覚えにカウントしたもので、厳密なものではないが、

参考のために附記した。北海道から九州に区分した項目の総数は 630 あるが、後に掲げる各地方言項目数の総数に一致するものではない。大まかに取り上げられる地域の分布の様子が見てとれればと考えてのものである。

〔仙台 13〕など四角で囲んだものは、他地域に比べて立項の分布に特徴があるものである。)

北海道 4 松前 4 (うばがしら、さいき、しがね、しまうり)

東北 96

東北 5 / 青森 4 / 秋田 / 南部 5 (えどあかざ、えどぜみ、かけだ、えほしがき) 南部ナドノ (さるかせ) / 南部カラ津軽 (かかべ) / 津軽 10 (しだみ、せんこき) 岩手ノ東北カラ青森 / 弘前 (かがはら) / 岩手 9 (がちょ、げやれやげれじ、しぢよこ、すかセル、すすてき) / 出羽 / 出羽最上辺 (じょんばらこ) / 陸奥 4 / 陸前 4 / 陸前ノ国細倉辺ノ方言 (おみょうにち) / 陸中辺 / 奥州 7 / 奥州青森辺 / 奥州白川 / 奥羽、奥羽辺 2、奥羽 (特ニ庄内辺 8) (かがちや) / 奥羽一般、コトニ南部カラ津軽 (かかべ) 〔仙台 13〕 (うしこむし、おにおに、おにむし、かぎばな、かくれかしか、かはさじ、からからし、からどり、ぎずム、ごごさま、さんぎぐわし、すば、そい) / 東国 (しさんのほし) / 北国 / 常陸 4 / 福島 2 (こがす) / 会津、米沢辺 (おろろク) / 会津庄内辺 2 (かがほしイ) / 会津 /

関東 20

主ニ東デイフ 4 (おしゃくじ) / 関東語 (すきとなイ) / 関東 11 (かけら) / 主ニ関東デイフ語 (おへない) / 主ニ関東デ子供ナドガイフ語 (おまんま) / 関東ノ小兒 / 関東デ今普通ニイフ / 関東ノ婦人ノ語 (しらち)

東京 42

東京ニ限ツテ云フ語 (うそつぱじ — 「ソナうそつぱしヲ云ツツテ乗ルモンカ」) / 主ニ東京デイフ語 8 (うな、うなだれ、うまのほね、うんざり、おかず) / 主ニ東京人ノ語 (ぎごちなイ) / 東京ノ俚語 13 (おてつく、おべんちゃら、おもくろイ、おんぶ) / 主ニ東京ノ俚語 2 (うんつく、おなじく) / 主ニ東京デ子供ノ云フ語・東京デ小兒ガイフ 7 (うなとこ、うまうま、おべたい、じゃあじゃあ) / 主ニ東京デ婦人小兒ガイフ語 (うんこ) / 専ラ東京ノ下等人ガ用キル (おたんちん) / オモニ東京カラ東北ニアタル近在デイフ (おとぎりす) / 東京ノ職人ナドノ一部分ニ行ハレル語 (おらつち) / 東京近在 4 (おしくら、かまぎつやう) / 東京ノ近在、南北足立郡 (かがめつちよ)

埼玉・群馬・栃木・千葉・神奈川 40

江戸以外ノ地方 / 埼玉地方 (かねとんぼ) / 武州近在 / 武州岩槻辺 / 武蔵国、

葛西 (さんかほし) / 武蔵国栗橋 / 武蔵秩父 / 上野 6 (さぶくさんがい) / 下野ノ国、佐野 / 下野辺 / 宇都宮辺 (さかぼう) / 日光山 (ごんべいる) / 上総 14 / 下総 4 / 両総 / 安房 / 安房上総 / 相模 3 (かくれかんしやう)

東海 (静岡・愛知・岐阜) 45

東海 / 東海道 / 沼津 / 沼津辺、僻地 (かさばちまいまい) / 駿河 8 / 駿河辺 / 駿河ノ国、沼津 (かじい) / 伊豆駿河辺 / 伊豆 14 / 伊豆ノ国大嶋 / 伊豆、下田 (せんびり) / 箱根、塔ノ沢 / 遠州 / 遠江 4 / 三河 2 / 尾張 (うよめ) / 美濃 3 / 美濃、尾張辺 (かがはゆい) / 飛驒 (かつしき)

北陸 (新潟・富山・石川・福井) 84

越後 52 (こしょうとんぼ、しほのり、しみもち、せいたかきび)・越後ノ国岩船郡 (かうのけ) / 越後ノ国、北蒲原郡 2 (かからしイ、きんにや) / 越後ノ国、西蒲原郡 (きんな) / 越後古志郡辺 (かめ) / 越後蒲原郡 / 越中 3 / 佐渡 13 (いとあをさ、かなぎつちよ、さかむかい、しじう、しままはり、すみじんので) / 越前 8 / 加賀 / 若狭

中部 35

信濃 33 (さすがり、すごほり、すなむぐり) / 信州、木曾 2 (しんぎぶくろ)

畿内 108

畿内 5 / 五畿内及び西国 (いだ) / 関西 11 / 主ニ関西デイフ語 / 関西、北越全体 (かがし) / 関西ノ一部分 / 主ニ関西デイフ (うんでれ) / 京坂 25 / 京阪デ多ク云フ語 2 (おいへさん) / 京阪、殊ニ大坂デ最モ多ク遣フ語 (さかい) / 西京 16 / 西京カラ関西ニカケテノ方言 (けんけん) / 京都 12 / 京都加茂川モヨリノ田舎 / 京都、鴨川辺 / 山城加茂 / 山城加茂川辺 / 西京大坂辺 / 京阪 (ざんない) / 今京阪デ主ニイフ 2 / 大阪 (坂) 4 / 大坂辺 2 / 堺 / 河内 / 泉州 / 和泉、堺 2 / 大坂、堺辺 / 摂津、伊丹 / 摂津 / 大和 4 (したこじけ)、大和辺僻地 (おんら) / 奈良・南都 3 (きがなイ)

三重・和歌山 33

伊勢 18 / 伊勢ノ一部 / 伊勢ノ僻地 / 伊勢国鳥羽 3 / 伊勢国長嶋 / 伊勢白子 4 / 伊賀 2 / 紀伊或ハ大和 / 紀伊 2 / 紀州

四国 37

四国 12 / 四国辺 / 伊予 6 / 伊予国松山 / 讃岐高松 (うみどんがん) / 讃岐 / 阿波 2 / 土佐 13

山陰・山陽 29

山陰道ノ方言 (くり) / 出雲 4 / 美作 2 (すんめ) / 備前 4 (さなり、しまふぐ、すつぽんもく) / 備後 / 伯耆 2 (いはのほり、いもは) / 安芸 2 (さあつくもうつく

／中国4(しらはへ)／山陽道及び四国／播磨7／丹波

九州 57

西海／西国6／西国ノ船頭ノ語(しゃばえ)／九州5／馬関(下関)(おどろしイ)／長門2／長崎／久留米／大分／豊前／豊後／唐津2／肥前14(さな、しゃうしやうてい)／肥後4／日向4／筑前6／筑後／薩州／薩摩4／琉球2(ぐすく、へご)

これによれば、東京はじめとして関東や畿内(京都・大坂)が多く、東北も少なくなく、仙台が目立っている。また北陸も少なくないが、とくに越後(新潟)や佐渡が目立つ。さらに中部では信濃に集中している様子も見てとれる。

以下は、これとは別に語頭音節別に方言項目をカウントしたものである。今回の調査では全体で1120項目の方言項目があることが分かる。

『言海』と比較して、かなり多くの方言項目が見いだされるのであり、そこに国語資料としての価値が見いだされる。

各部の方言項目数

あ	い	う	え	お		は	ひ	ふ	へ	ほ	
44	116	81	22	67	330	11	1	2	4	0	18
か	き	く	け	こ		ま	み	む	め	も	
200	54	16	25	81	376	5	1	1	0	1	8
さ	し	す	せ	そ		や		ゆ		よ	
44	82	45	28	10	209	4		0		1	5
た	ち	つ	て	と		ら	り	る	れ	ろ	
52	39	9	4	4	108	1	0	0	0	0	1
な	に	ぬ	ね	の		わ	ゐ		ゑ	を	
22	6	5	22	6	61	1	0		1	2	4
以上 1120 項目											

3. 方言項目立項の背景(編纂資料、調査)

方言項目を立項するに当たっては、当該方言に関する実地調査や、それぞれの地域で既に調査された文献などを編纂資料とする必要がある。

このような観点から、山田美妙自身も調査に赴いていた可能性を示す資料がある。山田美妙から大槻文彦に宛てた書簡(明治25年7月10日、ふみくら〈早稲田大学図書館報〉No.87〈新収資料紹介・翻刻 真島めぐみ〉による)である。この書簡の最後に以下のような記述が見える。

以上詳細は寸紙片語の申し尽くすべき所 にあらず 委細は跋文に記すべく
 くそのうへの御覧願ひまゐらせ候 不日方言取しらべかた／＼御地仙台ま
 でまゐり したしく

拜晤 委縷申上候所存に候 敬具

この書簡に対する大槻文彦の返信は確認できず、また実際に、山田美妙が仙台での「方言とりしらべ」を行ったのか、大槻文彦との面談が実現したのかも確認できないが、興味深い書簡の記述である。『日本大辞書』では、東北地方では仙台方言の立項が多いことを上に述べたが、このことは、山田美妙が実際に仙台に調査に赴いたことの反映なのかもしれない。

次に編纂資料に関してであるが、『日本大辞書』第十卷補の巻末にある次のような「おくがき」の記述が参考になる。

特に此書のために著者を佐けられた恩人の名を紀念として爰に記せば、中根叔、戸川残花、徳富猪一郎、塚原蓼洲、巖本善治、武田仰天子、畠山健、鳥居忱、小山作之助、並木善道、伊沢修二、田山宗堯、岡野硯、坪内逍遙、饗庭篁村、森鷗外、斎藤緑雨、近江の市川平太郎、横浜の半田研吉、熊本の堀口広助、遠江の大平慎一、周防の高橋為吉、佐渡の矢田求、信濃の小林芳三郎、堺の三坂絹、播磨の菅原雅輔等の諸氏、是等皆或ひは批評、或ひは助言、或ひは多数の購読者を介し、或ひは材料を送附された。独り材料のみを贈られた熱心な人は越後の田中勇吉、美濃の服部撫箏、尾張の山田米三郎、神戸の大賀壽吉、岩代の青山正等の諸氏、其他各位で、是等諸氏の中には著者と一面識の無い人も多く有つた。

このうち、たとえば「越後の田中勇吉」は、明治 25 年 12 月 30 日に『越佐方言集』を出版している人物である。この方言集は越後（新潟方言）と佐渡方言を集め、以下（越後方言からの例）のような体裁でその語義の説明を加えるものである。

○容赦スルヲかによする、又ハ、かにやするトイフハ「堪忍スル」義ナルヘシ。

○喧シキヲあつかましい、(コレハ女子ノ恥ヲシラヌイフ。)やかましい(強囂シ) かからしい (北蒲) さっこしねい (中魚) ナドイフ。

○玉蜀黍ヲ たうな たうまめ きび せいたかきび ナドイフ。

このような記述を編纂資料として利用し、『日本大辞書』の以下の「▲かにや・スル」と「▲かによ・スル」のような立項につながったと考えるのである。

▲せいたかきび (第五上) 名。越後ノ方言。タ
ウモロコシ。

▲かからしイ (第四上) 形。[かかハかがなく
ノかがト同ジ語]。越後ノ國、北蒲原郡
ノ方言。ヤカマシイ。|| 耳ニタツヤウデ
アル。

▲かにや・スル (第二三合) (第一上) 他動、六。
越後ノ方言。堪忍スル。|| カニヨスル。
△かにやまぶし (第二上) 名。(壁山伏し) 山
伏シヲ嘲ツテイフ語。かきやまぶしノ類。
▲かによ・スル (第二三合) (第一上) 他動、六。
越後ノ方言。カニヤスル。

『越佐方言集』の出版の日付、明治25年12月30日には、すでに『日本大辞書』第五卷(かろム～くらゐ)が明治25年12月23日の日付で出版されていることから、刊本の提供を受けたというよりも、そのための原稿などの段階での資料提供を受けたと考えられるのである。

以上は編纂資料と考えられる1例であり、この他、立項が目立つ信濃(長野)方言に関しても有力な編纂資料があったと考えられるが、調査が進んでいない。協力者に「信濃の小林芳三郎」(小林蹴月、小説家、劇作家)の名もあがるが、方言研究との関わりは不明である。他の地域も含めて、方言項目に関する編纂資料の調査を進めていきたいと考えている。

言葉の登録簿である辞書に、ある言葉が立項されることは、それ以降、その辞書を使う人々の間で共有の言語財産となることである。また、後世からは、その時代の言語資料としての価値を持つことになる。『日本大辞書』には、『言海』に収められなかった多くの方言語彙が収められている点で、我々にとって、明治時代語の貴重な言語資料となるものである。

また、編纂資料という観点において、『日本大辞書』が、どのようにしてこれらの方言語彙を立項することが出来たのかの探求は、明治20年代の方言研究史を紐解くことにもつながると考える。山田美妙は明治20年代頃の最新の方言研究の成果を利用した可能性があり、その点では、『言海』が方言項目の

編纂資料として、『物類称呼』などの近世期の成果を活用した〈(湯浅茂雄(1997))〉
様相とは異なるも側面があることも興味深い。

参考文献

- 前田富祺 (1991) 『国語学研究事典』(明治書院)「日本大辞書」の項
犬飼守薫 (2014) 『日本語大辞典 下』(朝倉書店)「日本大辞典」の項
湯浅茂雄 (1997) 『言海』と近世辞書(『国語学』188
湯浅茂雄 (2021) 『言海』『日本大辞書』の収録語数をめぐって

附記 本稿は、第118回国語語彙史研究会において、「語彙史研究資料としての山田武太郎『日本大辞書』 — 「●言専用」「▲方言、俚語」の見出し語彙を中心 —」と題する発表の一部に基づいたものである。

(ゆあさ しげお・実践女子大学教授)